
DISASTER ～災害の裏の真実～

新城高生

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

DISASTER 　　＼災害の裏の真実＼

【Nコード】

N5443M

【作者名】

新城高生

【あらすじ】

曰く付きの街に配属された若き消防士の話。

次から次へと襲い掛かる災害。その裏には、ある隠された真実が…

第一報

— 朱火市 あけび 朱火市消防局中央消防署 —

大自然に囲まれた朱火市。ここはかつて緑豊かな農業と漁業の盛んな村であった。

しかし、2000年より開始された大規模再開発により、農村はビル街に、漁港は貿易港に変わった。さらに綺麗な海を埋め立て、工場や空港が造り、雄大な山を切り崩し、住宅街を造り上げた。

街は政治家達の利権に溢れ、内外を問わず”ハコモノの街”と揶揄された。

しかし、いざ造ると人や企業が集まり、小さな村からいきなり政令指定都市へと変わった。

そんな朱火市を護るのが、朱火市消防局である。

四つの消防署と一つの分署、八つの出張所で構成され、およそ1000人の消防吏員を抱え、ヘリや消防艇、さらには東京消防庁と同じく、消防救助機動部隊を有している。

その四つの消防署の内の一つ。中央消防署にこの日新人が入ってきた。

「本日付でこちらの中央消防署に配属になりました！足利新一消防士です！！よろしくお願いします！！」

威勢の良い挨拶と共に、彼は固い敬礼をした。そのぎこちなさを、書類にまみれたデスクに座る初老の男性が笑う。

「そんな固くなるな。ま、私も人のことは言えなかったが…それより自己紹介がまだだったな。私が大隊長で消防司令長の武田信人だ。よろしく頼むよ。」

二人はがっちりと硬い握手を交わした。

「早速だが君の配属場所だ。君の配属は…中央1、ポンプ隊第一小队だ。」

「はい！」

足利が振り向くと、武田があっちだと部屋の真ん中辺りを指し示した。

「あっ、はい！ありがとうございます！」

足利は武田に再度一礼し、小走りで第一小隊のデスクに向かった。

「あ：あの：本日付で中央消防署第一小隊に配属になった足利新一です！！よろしくお願いします！！」

「おっ！威勢の良い新人だなあ。しかもイケメンじゃないか！良かったな細川。」

細川と呼ばれた女性は足利の方をチラッと見た。

「好みじゃない：」

彼女は味も素っ気もない返事をして再び書類を書き出した。

「：あぁと、すまなかったないきなり。それより自己紹介だ。私が第一小隊長消防司令補の三好優人だ。」

「俺が隊員の消防士長、松永壮介だ。よろしく頼むぜ。」

二人で握手した後、視線が細川に集まった。

「ん？アタシ？アタシは機関員で消防副士長の細川茜。ヨロシク。」

細川はデスクの上のクッキーを食べながら力なく手を振った。

「ま、仕事はできる奴だ。馴れば気にならなくなる。」

隊長にそう言わしめる彼女って一体：そんな下らないことを考えていると、突然後ろから肩を組まれた。

「よお！久しぶり！」

驚いて振り向くと、見知った顔があった。

「北条先輩！？：そう言えば、配属先中央署の救急隊だって言ってたような：」

「にしてもお前が来るとは思わなかったし助かったあ：」

足利は会話の中に紛れた気になる単語を聞き逃さなかった。

「助かった？」

「あっ：まいっか。いやあ去年ここにきた新人が俺一人でさあ、雑用が全て俺に降りかかって来んだよねえ：：という訳で今年はお前の

番だ。」

北条は嫌な情報だけ吹き込むと、軽い足取りで自分のデスクに帰っていった。

あまりのことにボーツとしていると、署内に出火報が鳴り響いた。

第二報

” 中央区出火報！中央区出火報！

朱火市中央区赤松町153—1龍ヶ崎方、住宅一階より出火！

出場隊、中央1・2、中央救助、中央救急！”

いきなりの出場指令に、思わず立ち竦む足利を三好が突き飛ばす。

「おい、ボサツとしてんじゃねえぞ新人！！」

「はい！！」

足利は慌てて先輩達の後を追った。

階段を駆け降り防火衣をひったくり、素早く着こんでポンプ車に飛び乗る。

「全員乗ったわね！！行くわよ！！」

細川は一瞥して確認すると、けたたましいサイレンを鳴らしてアクセルを目一杯踏み込んだ。

” 赤松1より各隊、現況を送る。

不明者2名ありとの情報。内、要救助者1名の確認が直ぐに行われた為、現在救助中。以上。”

” 全員助けといてくれると楽なんだがな…”

無線の向こうでレスキューの隊員がぼやいた。

「まあ、無理だろうけどな…」

三好は頭の後ろで手を組ながら、車の窓の外を眺めて言った。

窓の外にはどす黒い煙が天高く伸びている。

「すげえ…」

「ただの家で何であんな燃える？延焼はしてないんだろ？」

揉める男達に細川が口を挟んだ。

「知らないの？龍ヶ崎って言ったらあの龍ヶ崎商事の会長よ！自宅の敷地面積はうちの本部より広いらしいわ。」

「すごいですね、細川さん…」

「まあね。」

細川は鼻を高くしながらも丁寧ハンドルをきる。

「着いたぞ！」

車が止まると同時に全員が飛び降りる。

現場では、すでに直近の赤松出張所のポンプ隊が到着し、消火活動を行っていた。

「うわぁ…本当にでけえ家だな…」

堂々たる土壁に瓦の塀と、古めかしい門、その向こうには荘厳な日本庭園が広がり、さらにその奥で二階建ての木造の古民家が勢いよく燃え盛る炎に包まれていた。

「おい！早く来い！！いいか、足利は吸管結合、細川は放水準備、松永は筒先展開！ほらモタモタすんなよ！！」

足利は先輩達に遅れをとらないように、素早く吸水ホースを抱えて消火栓に走った。器具を使い蓋を開けて、中のパイプにホースを繋ぐ。

「吸管結合よし！」

「よし！全隊集合！！！」

指揮車の前で武田が叫んだ。それを聞き全員が整列する。

「要救助者一名を先程赤松1が救助した！しかし尚も家主龍ヶ崎憲治が行方不明！恐らくまだ屋内にいると思われる！！」

そこで、これ以上火勢が強くないうちに内部に進入、人命検索を行う！！

進入隊は中央救助、中央1！中央2は外部注水！！」

「よし！進入準備始め！面体装着！筒先を持て！！」

三好のかけ声に合わせ、ボンベを背負い呼吸器を顔に着け、ホースを持って再度集合した。

「進入準備よし！！」

「細川送水始め！！」

「送水始めます！！」

細川がポンプ車のレバーを引くと、勢い良く大量の水が送られ、ホースの先から飛び出した。

そのあまりの強さに、足利は思わずよろめく。

「おい！このくらいでフラフラしてんじゃねえぞ！！」

「はい！！」

足利は固く脇を締め、強くホースを握り、目一杯足に力を入れて踏ん張った。

「家屋内進入、及び人命検索開始！！」

「よし！！」

こうして、重厚なる装備を調えた男達の、熱く、長い闘いが始まった。

第二報（後書き）

御意見・御感想お待ちしております

漂流自衛隊、街のクマさん、活動報告内の街のクマさん公式外伝も
よろしく願います

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5443m/>

DISASTER ～災害の裏の真実～

2010年10月11日00時57分発行